

2024年度グローバル文化学科 優秀卒業論文

優秀卒業論文・学科長賞

氏名	神田 真明
所属	グローバル社会動態プログラム／多文化共生論クラスタ
賞名	「政治経済ドキュメンタリー賞」
論文題目	台湾科学技術政策における工業技術研究院の役割変化――2005年(民国94年)の予算削減に着目して
学科長コメント	台湾の半導体産業発展における工業技術研究院(ITRI)の役割を歴史的制度理論を用いて分析した本論文は、与党DPP、野党KMT、工業技術研究院、米中・台中関係などに注目し、産業政策とそのスピノフ効果がグローバルな成功を収める企業を生んだプロセスを、詳細に検討している。また、党派対立や制度転用の観点から、工業技術研究院の役割と予算配分の変化およびその政治的背景を、説得力を持って明らかにしている。日英中国語の文献を駆使した綿密な調査に基づくその筆致は、硬派の政治経済ドキュメンタリードラマの原作のようで、スリリングな気持ちで読みました！
クラスタ推薦文	本論文は、台湾の半導体産業興隆の原動力となった公的研究機関である工業技術研究院の果たした役割について、歴史的制度論を援用して政治学的な分析を行ったものである。本論文は、①当時与党であった民主進歩党(DPP)、②工業技術研究院が創設時の最大野党であった中国国民党(KMT)、③工業技術研究院(ITRI)、④米中関係と中国の脅威という国際政治的要因、の4点に着目し、国家主導で始まった台湾の産業政策が「スピノフ」効果を発揮し、工研院で育った技術と人材によって新たな民間企業が設立され、TSMCとUMCというグローバルに成功する半導体企業が誕生するに至ったプロセスについて詳細に検討している。本論文はまず、歴史的制度論に関する政治学の先行文献や台湾の政治史、産業政策の発展史に関する日本語の先行研究や中国語、英語文献、台湾の立法院の議事録などを踏まえて工研院に関わる予算の審議過程における党派対立の実態について実証的に明らかにしている点が高く評価できる。その上で工研院の役割の変容について、セーレンとマホーニーの歴史的制度論の枠組みに依拠し、「弱い拒否権の可能性と解釈・強制の自由裁量」による「制度転用」が行われたものと解釈している。このように歴史的制度論の理論的解釈に基づき、台湾のハイテク産業の成長の基礎を築いた公的研究機関の役割とその政治的背景を説得的に明らかにしている点でも特に優れた論文であると高く評価できる。
氏名	磯部 ほのか
所属	現代文化システム系プログラム／芸術文化論クラスタ
賞名	「ポストコロニアル美術批評の傑作で賞」
論文題目	アート作品が促す対話による「西洋／アフリカ」二元論の克服――ベルギーの王立中央アフリカ博物館におけるアート作品《RE/STORE》の分析

学科長 コメント	本論文は、ベルギー王立中央アフリカ博物館の脱植民地化プロジェクトの一環として制作された、コンゴ人アーティストE・ムパネとベルギー人アーティストJ・P・ミュラーによる2019年の共作《RE/STORE》における美術史的かつ政治的意義を考察している。留学中に行った詳細な参与観察と、日英仏語の文献精読を基に、アフリカ美術の歴史とオリエンタリズム／セルフ・オリエンタリズム理論の枠組みでこの作品を分析し、ポスト・コロニアル美術批評の王道に新規的な一歩を記したことは、学部生の卒業論文としては抜群と言える。また、《RE/STORE》の16作品それぞれについての批評を行い、充実した別冊資料としてまとめた点も、クラスターと同様学科長としても評価します。
クラスタ推薦文	本論文はベルギー王立中央アフリカ博物館の脱植民地化プロジェクトの一環として、コンゴ人アーティスト、エメ・ムパネとベルギー人アーティスト、ジャン・ピエール・ミュラーが共作した、《RE/STORE》(2019年)の現代的・美術史的な意義を問うた労作です。学生本人がベルギー留学中に行った作品の詳細な観察と、日英仏三カ国語で書かれた多量の文献の精読に基づき、いまだ評価の形成期にあり先行研究もほとんどないこの現代アート作品を、ベルギーとコンゴの関係の歴史、美術史におけるアフリカ美術の位置付けの変遷、オリエンタリズムとセルフ・オリエンタリズムといった多角的な視点から考察して一つの作品論としてまとめあげた点が大いに評価できます。また、本編に加え、合計16の作品で構成されている《RE/STORE》の一つ一つの作品について詳細な個別分析を行い、充実した別冊資料としてまとめた点も非常に重要な成果です。

優秀卒業論文

氏名	王 紗羽
所属	地域文化系プログラム系プログラム／アジア・太平洋文化論クラスタ
論文題目	現代中国社会におけるキャッシュレス化の現状とその社会的影響 — 中国湖北省武漢市をフィールドに
クラスタ推薦文	本論文は、世界に先駆けて進展している中国の「キャッシュレス化」について多角的に考察した力作である。キャッシュレス化は消費やビジネスの決済手段を変化させたのみならず、人々の生活や企業のビジネスモデルをも大きく変化させつつある。本論文は、中国でキャッシュレス化が急速に進展した背景を多面的に検討した上で、キャッシュレス化の社会的影響にも切り込んだ先駆的かつ意欲的な研究であり、出色の卒業論文であるといえる。

氏名	安井 渚
所属	グローバル文化形成プログラム／ヨーロッパ・アメリカ文化論クラスタ
論文題目	ポーランドの負の歴史をめぐる展示—POLINの分析から見る対話と和解の可能性—
クラスタ推薦文	当該論文は、ポーランドのワルシャワにあるポーランド・ユダヤ人歴史博物館(POLIN)の展示が有する意義について、ユダヤ人およびポーランドの歴史を丁寧に紐解きながら、主にそのカタログの分析から明らかにしようとしたものである。ポーランドの近現代史はもっぱらナチによる「犠牲者」としての観点からのみ語られてきた側面があるが、近年の研究動向を踏まえた当該論文はそうした桎梏から解き放たれ、ポーランドの加害者性にも光を当てる。その中で、丁寧な歴史叙述とカタログ分析のみならず、現代ポーランドにおける歴史認識をめぐる政治的力学、歴史記憶の問題、博物館を取り巻く「パブリック・ヒストリー」の現状といった複雑で込み入った事柄についても、英語・ポーランド語文献を読み込んで的確に叙述がなされていることは、本稿の価値を大きく高めている。
氏名	定常 琴梨
所属	異文化コミュニケーション系プログラム／異文化関係論クラスタ
論文題目	チャンブリ社会の現在
クラスタ推薦文	チャンブリ社会は、1930年代の有名なアメリカの文化人類学者マーガレット・ミードの報告により、俗に男女の性役割が逆転している、として注目を集めた民族である。近代化によって変容するその民族の姿を、1970年代に追調査を行った民族誌と、周辺民族の民族誌を参照して解明しようとした。本邦では紹介されていない民族誌を中心に、いくつかの論文、民族誌などを用いて立体的に再構成しようとした労作である。
氏名	多田 友里子
所属	現代文化システム系プログラム／先端社会論クラスタ
論文題目	暴動とジェンダー ラジ・リ監督『レ・ミゼラブル』(2019)を参考に
クラスタ推薦文	本論文はフランス大都市「郊外」の移民コミュニティにおける「ジェンダー化」をキーワードに、暴動と男性主体の直截な表象を批判しながら、女性が私的空間に押し込められることで暴動の現場としての公的空間を男性に専有させる仕組みを現象学的に明らかにした。監督自身がパリ「郊外」出身である映画『レ・ミゼラブル』を題材に暴動をジェンダーの視点から検証するという、新規性に富み稀有でチャレンジングな卒業研究である。
氏名	奥村 耕司
所属	言語情報コミュニケーション系プログラム／言語コミュニケーション論クラスタ
論文題目	How the Politicians Saw the COVID-19 Pandemic: Linguistic Analysis of Social Media Discourse of Political Leaders in the USA, the UK and Austria

クラスタ推薦文	本論文は、グローバルイシューとしてのコロナウイルスを当時の政治指導者がどのように捉えていたかを、批判談話分析の観点から考察した研究成果である。X(旧Twitter)上の英語・ドイツ語の投稿に使われた比喻と文法を緻密に分析することで、トランプ大統領(米)、ジョンソン首相(英)、クルツ首相(奥)の文体とその政治的機能を実証的に論じ、それを英語で的確かつ説得的に表現する学術的水準はきわめて高いものである。
氏名	市川 眞湖
所属	グローバル・コミュニケーションプログラム／感性コミュニケーション論クラスタ
論文題目	自己優先効果の背景:パーソナリティとの相互作用
クラスタ推薦文	本論文は、自己に関わる情報に対する認知処理の優先効果をパーソナリティとの関連から探るものである。先行研究を踏まえ、自己を表すパーソナリティ特性語に対する優先効果を検討し、ポジティブな特性語を自己選択した場合には特に優先効果が認められることを示した。先行研究(Sui et al., 2012)と類似した効果を確認しつつ、選択したパーソナリティ特性、感情価と自己優先効果との関係を検討するという着想から実験を展開しており、自己優先に関わる背景について洞察を得ている点で高く評価できる。
氏名	成願 もえ
所属	言語情報コミュニケーション系プログラム／情報コミュニケーション論クラスタ
論文題目	どこまでが“自分の顔”か -顔加工の自己認識限界に関する研究-
クラスタ推薦文	本論文は、顔写真の加工の程度とその写真を見た際の違和感の有無の関係に対する、写真の人物を知っていることの影響を分析している。実験の結果、顔の輪郭が違和感に最も影響が大きいこと。その影響は、自分自身と他人というよりも、人物を知っているかどうかによって異なることが示されている。一般的なスマホアプリSNOWを利用して網羅的な実験を組み立てた点と、統計的な分析により丁寧に結論を導き出している点が優れている。

※越境文化論クラスタ及びモダニティ論クラスタからは該当推薦者がありませんでした。